

唇顎口蓋裂患者における矯正治療術式について

東京医科歯科大学歯科矯正学第二講座 黒田 敬之

唇顎口蓋裂患者に対する治療術式を検討する目的で、片側性唇顎口蓋裂患者および口蓋裂(単独)患者について、形態学的な分析を行い、さらに治療方針の調査および矯正治療による顎態の変化について検討を行った。

資料は、9歳~13歳までの片側性唇顎口蓋裂患者45名(男子29名,女子16名)、7歳~15歳までの口蓋裂(単独)患者38名(男子11名,女子27名)である。

対照の値としては、過去に本学で行われた正常者の研究から、該当する年齢のデータを選んだ。

結果として、片側性唇顎口蓋裂患者の顎態パタンの特徴は上顎前歯の舌側傾斜を伴う上顎骨後方位による骨格性の反対咬合であった。成長パタンの特徴は、上顎骨の前後の劣成長による上下顎骨の前後的不調和の経年的増悪であった。

一方、口蓋裂(単独)患者の顎態パタンは上顎中切歯の舌側傾斜を伴う上顎骨後方位がその特徴であったが、加えて下顎も正常者に比して小さい傾向にあると思われた。成長パタンでは、上顎骨の前後的な劣成長が認められたが、下顎骨も加齢と共に後方位をとる傾向が認められた。

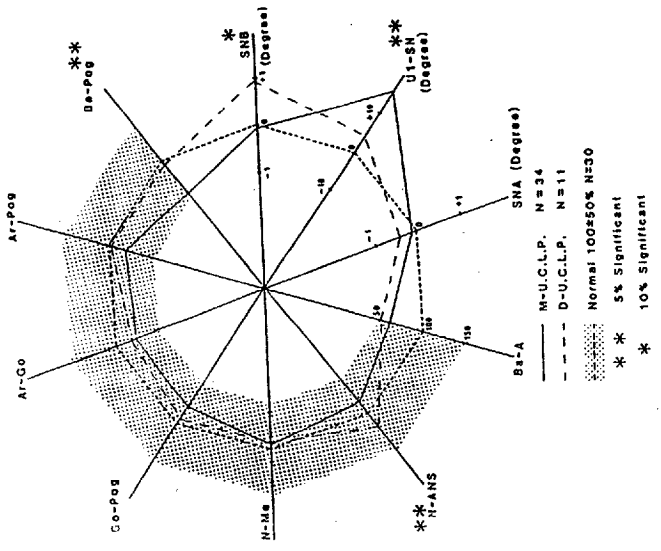
以上より、片側性唇顎口蓋裂患者と口蓋裂(単独)患者と比べた場合、両者には特に下顎において差異が認められ、治療術式においても当然差があることが予測された。

そこで実際に行われた処置方針を調査した結果、片側性唇顎口蓋裂患者に対しては、上顎歯列弓の前方および側方拡大、chin cap が多く行われていることが分った。更に、chin cap を行った症例における成長パタンは、下顎の後下方への回転を生じたことを示した。また、上顎歯列弓の前方および側方拡大を行った症例では、上顎前歯の唇側傾斜を認めるが上顎基底骨の前後の劣成長の改善は計られていないことが分った。

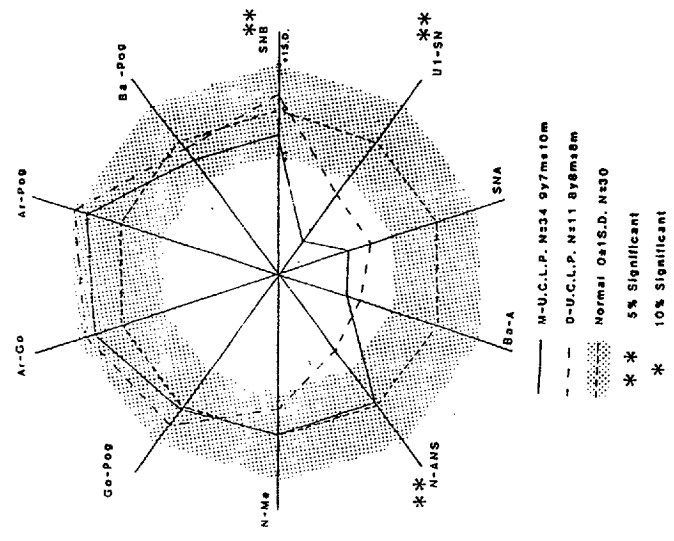
一方、口蓋裂(単独)患者に対して行われた処置方針は、chin cap、上顎歯列弓の前方および側方拡大が多く、上顎前方牽引が僅かであった。

以上より、唇顎口蓋裂患者に対する治療術式は、片側性唇顎口蓋裂患者と口蓋裂(単独)患者とどのような裂型別による形態学的な特徴を考慮に入れたものとは考えられなかった。今後は、片側性唇顎口蓋裂患者に対しては、より積極的に上顎骨の前方成長を促す術式が望まれるし、口蓋裂(単独)患者に対しては、下顎抑制を期待する chin cap よりも、上顎骨の前方成長を期待する上顎前方牽引装置を適用する方が妥当であると考えられる。

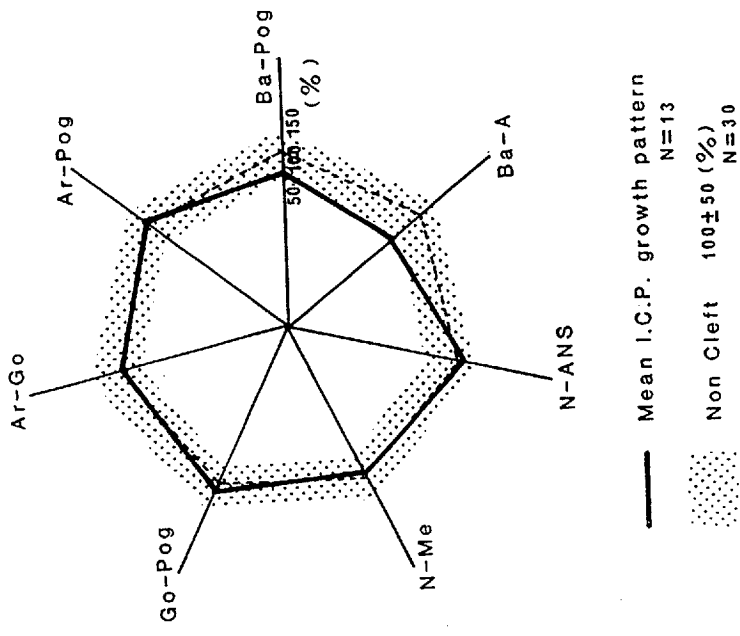
今回の調査によって、従来行われてきた矯正治療術式に対し、再考すべき点が明らかにされたと思われる。



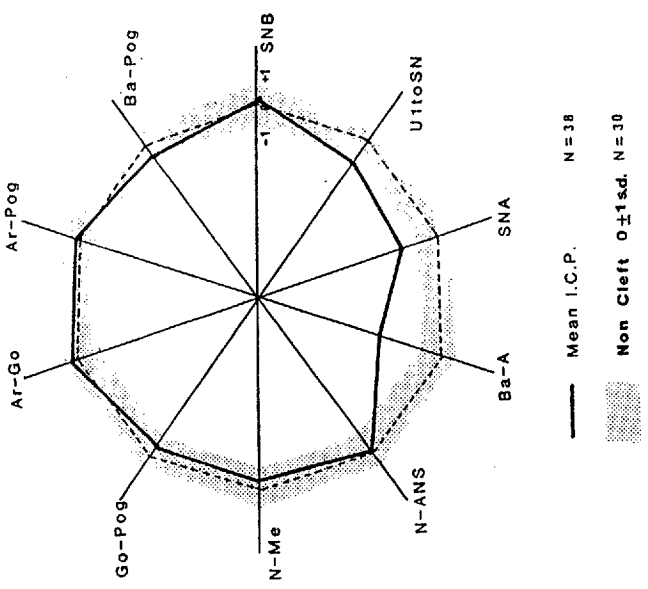
片側性唇顎口蓋裂患者の成長パターン



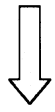
片側性唇顎口蓋裂患者の顎態パターン



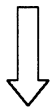
口蓋裂(単独)患者の成長パターン



口蓋裂(単独)患者の顎態パターン



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



唇頭口蓋裂患者に対する治療術式を検討する目的で、片側性唇顎口蓋裂患者および口蓋裂(単独)患者について、形態学的な分析を行い、さらに治療方針の調査および矯正治療による顎態の変化について検討を行った。